

春燈

七月号

7

July 2008



成瀬櫻桃子の句

天高し。ピサの斜塔とさざえ堂

会津飯盛山さざえ堂下の句碑 平成十年

平成九年秋の春燈勉強会は十年ぶりに会津東山温泉。櫻桃子先生は初めて会津に足を運ばれ、白虎隊士の墓に滂沱として御焼香、さざえ堂に登られたが、その折の句。碑は三メートル余。石は大同年間の磐梯山噴火の転石。枝垂桜は先生手植の記念樹。句は東西の異色の堂塔を対比した会津への挨拶。初案は「釣瓶落し」とのこと。もう一度だけ先生に御覧いただきたかった。噫。

滝沢 幸助

成瀬櫻桃子の句

したたりののつぎの雫におもひ罩め

句集『素心』昭和五十六年

したたりへ寄せる思いが詠まれています。それはそのまま俳句への思い、ともいえるでしょう。日常生活に置き替えても、この句はとも示唆に富んでいます。失敗した時など、この句から力をいただけるのです。一滴、一刻、一句が大切な事を教えて下さいます。たつぷりとした思い入れのあふれたこの句を胸に、これからの俳句人生を過ごしていけたらと、思います。

橋 本 リ エ

燈下集

鈴木榮子

鳥雲につつしみ深く話さねば

座禅草座つて聴いて呉れにけり

苜蓿とおみなが書けば艶めくよ

顔ざぶとひとりの菖蒲湯長湯して

菖蒲湯に由無き事は忘じけり



米研ぐ音

佐々木良玄

米研ぎし音や流しに露のたう
川底の音椀の中蜷汁
はこべらやをんなは倦まぬおさんどん
虎杖や農婦の爪は白からず
さくらさくらサ行はさびしき音ばかり
菜の花や隣の村の救世観音
先に来て遅れて帰る彼岸墓
ちよいと出てちよいと帰るや花の道
春麗ら写真館にある赤子の額
花筏浄土の国は雲に乗り

羅
白
へ

馬崎千恵子

日本の突端にゐて山ざくら
松の花天上天下風渡る
国後の島影蒼し鳥帰る
八重桜峠の風は九十九折
揚雲雀海群青にさざめける
黄水仙原野の果ての岬かな
貝塚に混じる人骨花の雨
鶯や湖に没日の色溶くる
ともし灯に潮の香のあり竹の秋
春の虹千島の沖に架かりけり

当月集

鈴木 榮子選



○ 金子輝

先生の仇名決まりぬ散るさくら

逃水やブッセの空のあなたまで

昭和の日町に掛かりし曲馬団

春陰や印伝細工の煙草入れ

杖許す限りの春を惜しみけり

○ 後藤眞由美

焼蛤こころの殻のひらく音

夜桜の白き炎誰のレクイエム

夕闇の潤み薄るや四月尽

あを三百の魁夷の絵具風薫る

メーデーやゆるりと進む木遣り唄

○ 小田切明義

陽炎へるふるさとの地よ遠汽笛

汐干狩子ども声の飛沫かな

春眠の夢に飛び込む微震かな

知らぬ子にぢいぢと呼ばれ夕桜

ひとり酌む酒よし春の月夜かな

○ 乗田忠男

出開帳飛鳥の菩薩御座します

吉祥天面輪ゆたかに春の燭

屋久杉の千古の洞や苔の花

大寺の裏手を固め女郎蜘蛛

禅林に結跏趺坐すや時鳥

○ 山川好美

鯉のぼり川に彩なす村起し

柏餅老舗の幟の筆の文字

矢車や鳴らす風はも過疎の村

音をさき湧水走る著我の花

薄化粧気取りを隠す夏帽子

春燈の句

鈴木 榮子選

埼玉 忍足ミドリ

鈴の緒や八十八夜の音鳴らす
川底を見せて音無川五月

五月雨るる音無川で別れたり

風五月髪の祖神に一礼す

山の宿八十八夜の湯をこぼす

逃げ水の回しをるがに水車かな

なかななく宇治十帖の蓮の花

麦秋の大河流れり小さき村

贈られし泡盛に酔ひ君想ふ

暮の春背ナより拝す菩薩かな(薬師寺展)

吉祥天長き裳裾に緑さす(薬師寺展)

ペダル踏む脚の長さよ五月来ぬ

禅林にからたちの花高きかな

からたちのとげやはらかき緑雨かな

でで虫の見目よき佐原十二橋

母の日に選ぶ揃ひのパジャマかな

桜蔭踏みゆく贅も古稀の宴

寄する波に足跡乱る暮の春

一駅をローカル線の通路連れ

噴水の三分は空へ還す風

快心の横綱相撲春の宵

ふるさとを語る饒舌花は葉に

惜春や食器がちやがちや洗ひをり
通し鴨この目にしかと四羽かな

東京 米澤しげる

東京 小島 昭夫

千葉 竹内 慶子

岡山 村瀬 憲正

大阪 淡路久仁子

寄りそひて仰ぎし人よさくら咲く

蛤鍋やくすぐつて取る貝柱

寿限無めく銀行名や養花天

小波に織りこむ花や楽羽亭

穴出でし蟻一列の律儀かな

古池の生命反応蝌蚪の紐

永き日や靴脱いで待つローカル線

鈴振れば花の応ふる札所かな

遠郭公深山は神知るしめす

郭公や一本高き岳樺

授かりし男の子ありけり菖蒲風呂

みどり児の夢は何色薔薇開く

千切へゆくへも知らぬ落花かな

中天はシャガールの青夕桜

藤垂るる胼けだるき夕べかな

俊寛の船を返せと汐まねき

東京 神山 志堂

埼玉 鈴木 撫足

千葉 中嶋 昌子

京都 片山 博介

余言

鈴木 榮子

振花の振れの不思議見てゐる子

吉田飛龍子

振花（ねじばな）ねじりばなではない。関連季語に文字摺草がある。ランの仲間。振れているのは茎でひよろひよると振れながら伸びている。花は淡紅色で可憐である。

焼蛤こころの殻のひらく音

後藤眞由美

伊達公子見事に復帰風薫る

平 絵美子

焼蛤自身がこころとは言っていない。あの拳ほどの大きさ、閉じた形にもし殻をひらいたらと、焼蛤にこころを開く音を連想させている。こころの殻を開く音とは思いきつた比喩。この句は主観句でこの比喩に納得出来ればよい。

強い意志と決意、執着、情熱を以てずつと選手時代に劣らない練習を続けていらつしゃったのではなからうか。俳句も一日休むと一週間後退、一週間休むと一ヶ月戻ると言われているが意欲の問題ではなからうか。

四、五人の子の輪の中や蟻地獄

中上 馥子

緑陰に飽きし機関車レール欲る

吉川 隆

蟻地獄は大歳時記の例句を見ても、その前後の季語の三倍ぐらい載っている。魅かれる季語である。

四、五人の子供達がのぞいた蟻地獄は初めて見る現実の地獄であろう。

機関車は現役引退後飛鳥山に置かれている。さすがD51は大きい。機関車の上になれるので大人も子供も乗ったり、写真を撮ったり楽しんでいる。D51ももう一度レールの上を走りたいと思うだろうと作者も詠んでいる。

鈴の緒や八十八夜の音鳴らす

忍足ミドリ

王子という東京の北のはずれは野趣のあるところで、晦日には狐達が装束稲荷に集まって装束を整え打揃って、王子稲荷をお詣りするという。今でもお狐さんがいるといつて早朝油揚げにゆく古老がいる。

八十八夜の鈴を鳴らす仕儀になったことは、お狐さんのお計らいではないかと思ったりする。

花筏どこで組みしや神田川

赤岡 茂子

花筏は本来葉の表面中央部分葉脈上に花をつける野趣のある庭木をいつた。またいまは桜の花びらがかたまつて流に乗って流されて行く様子を実景そのものを見て花筏と言っている。川に流れる花びらを筏に見立てたものである。

退り仰ぐ泰山木は男の花

滝沢 千枝

大形の皿状の花の咲くのは見事で、上品さを持っている

クリーム色の色香の男の花の感じは領けるものがある。泰山木の花は上品で立派な女性の花とイメージしていたが、男の花という見方もあったのか。



(以下略)